

田中仁さんを偲ぶ

広島中国近代史研究会事務局（金子肇・水羽信男・丸田孝志）として、例会の案内を送付しているメンバーに、2023 年 4 月 14 日にご病気で亡くなられた田中仁さんの追悼文の執筆を呼びかけました。

その呼びかけに答えていただいた 15 名の追悼文をここに掲載します（日本語読み 50 音順）。当然、私たちの設定した締め切りがもっと遅ければ書くことのできた方もおられたでしょうし、そもそも例会案内のメンバーリストに不備もあったかもしれません。その点はこの場をおかりしてお詫び申し上げます。

なお田中さんの職場だった大阪大学法学部では、追悼のページが開設されています。URL は以下の通りです。 <http://www.law.osaka-u.ac.jp/c-forum/tanaka/tanaka.htm>

石川禎浩

田中仁さんの口ぐせ



図1 田中さん 45 歳(当時、大阪外国語大学外国語学部助教授)、石川 36 歳

今年 2 月、わたしが京大で主宰している研究班で、田中さんは研究報告をされた。体調がすぐれず、発話にも少し難があるという理由で、報告動画を作成し、それをオンラインで視聴、報告後の討議はオンライン（リアルタイム）で行った。声にかすれはあるものの、しっかりした口調と的確な応答で、通常の報告・討議と何ら変わりなかったのを覚えている。1 カ月後の 3 月末、論文集用の論稿を提出して下さった。それからわずか半月で急逝せられたわけで、訃報を受けた時には驚くとともに、かの報告と論文とは、田中さんが最後の力をふりしぼって完成させたものだったのだという感慨に打たれたのだった。

田中さんを知るようになったのは、確か人民共和国成立 50 周年にあたる 1999 年 10 月、中国社会科学院近代史研究所などの主催する記念の学術賞（中国革命史中青年学術賞）の授与式が広州であり、「海外優秀論文賞」に選ばれた田中さんとかの地でまみえたのが最初と記憶する。式典のあと、参観ツアーで黄埔へ行っった時の写真が残っている。当時、田中さんは 45 歳、わたしは 36 歳、まさに革命史を研究する「中青年」だった。

当時のわたしの目に映った田中さんは、少々理屈っぽい、つまりは問題意識が非常にしっかりした人で、それをフランクな語りに載せてお話しになるのだった。何か題材を取り上げて本質的な事柄に触れた後、「じゃ、それって何なのかなあって考えてみたんです」と少し甲高い声で続けるのがいわゆる田中節で、1999 年以来いったい何度そのセリフを耳にしたことだろう。2017 年、科研費のグループで訪中し、田中さんと二人で天津の南開大で講演したことがあった。われわれ二人は中壮年となっていたが、田中さんが中国の学生に問いかける口調は相変わらずだった。その時の参観ツアーは楽亭の李大釗故居、天津－唐山－楽亭の車内でも「それって何なのかなあ」という言葉を交えてご自身の研究を話してくれた姿がまだ目に浮かぶ。

田中さんと初めてあったのは1983年晩秋の或る日のことです。場所は東千田町にある広島大学図書館の正門の近くです。北京で中国社会科学院歴史研究所によって主催される研究会に参加して帰ったばかりの田中さんは、自己紹介の後で興味深く研究会の状況や論議されたテーマなどを紹介して下さいました。当時、田中さんは中国現代史、取り分け中国共産党の統一戦線戦略の研究をされていました。18世紀のイギリス史学史を専攻してしかも日本に行って一年足らずの私にとって、興味深い話ばかりでした。

お互いにそれぞれの研究計画に関する交流をしてから、ヒュームの歴史思想を解明するためにまずその論敵であったボーリングブルックの歴史思想を考察するから始めようとする私の考え方に対して、田中さんは好評を下さいました。「自分も毛沢東の統一戦線思想を研究するために、先ず王明の統一戦線理論から研究し始めた」と言われました。研究の対象が違いますが、研究のルートは同じだということでしょう。初対面の専門が違う先輩から励ましていただきましたので、本当に喜びました。それから、時々中国現代史上の問題について色々と教わったりするようになりました。今日でも、外国で外国人によって久し振りに中国現代史を復習する機会が与えられたことは心の中に印象深く残っています。

1991年の2月に、文部省の奨学金で中国の大学で研究を行うために来られた田中さんと上海の空港で再会致しました。私が所属している華東師範大学は田中さんのこの度の研修計画の最後の訪問場所です。週に1回か2回くらい、田中さんの大学宿舎で史料の整理や問題の論議などをゼミのような形で行っていました。それが終わりましたら、華東師範大学の西門を出た棗陽路に並んでいる小規模なレストランで紹興酒を一杯やって帰ります。その時期は田中さんとの付き合いが最も多く快適な日々でした。3ヶ月はあっという間に経ちました。日本に帰る前夜、上海のユニオンビルにあった友友という日本料理店へご案内いただきました。久しぶりの刺身でしたし、その後も度々懐かしく日本酒を飲みに行ったりするところでもありました。

1995年1月、阪神大震災が起こった1週間後、田中さんと北千里の居酒屋で午後6時から夜中の2時まで、甘口から辛口までの日本酒を、恐らく30種類飲みました。その夜は私にとって確かに今までで酔いが酷い日でした。その時は、地震のことや自分自身のこと、大学のこと、研究のこと、家族のことなど色々な話題に花が咲きました。それらの話と議論はその後の何十年の間にも時々思い出されたりします。

田中さんが大阪外国語大学に就職してから、私は関西に行く度、必ず田中さんに連絡致しました。なぜなら、鍋物や焼肉或いは関西料理などをご一緒できるからです。関西旅行の重要な楽しみの一つとなりました。2010年の夏に、娘を連れて日本旅行に行った時も、大阪のレストランに招待されました。食事が終わって、レストランの出入口でお別れを告げた時、それが田中さんとの最後のお別れとは夢にも思いませんでした。

田中仁さんのご冥福をお祈り申し上げます。

郭海良 2023年8月3日

学部3年生の頃だったと思う。東洋史研究室の同級生に誘われて「現代アジアを考える会」という研究会に参加した。略して「現ア会」と呼ばれたその会を主宰していたのが、当時修士の院生だった田中さんだった。笹川裕史さんはすでに会の一員だったと思うし、田中さんの奥さんも一時参加していたはずだ。手作りの現ア会のパンフレットを保管していたのだが、今やどこにしまい込んだのかも定かでない。

現ア会は、歴史学に限らず多様な角度から、現代アジアの様々な問題を発表し議論する会だった。千田夏光の『従軍慰安婦』をめぐる議論したことがあるし、アジアのナショナリズムに興味をもっていた私は吉本隆明を取り上げたこともあった。主催者の田中さんの人柄を反映してか、とても自由な雰囲気の研究会だった。

例会はいつも田中さんのアパート、畳敷きの四畳半でこたつ机を囲んでだった。口髭を生やした田中さんが煙草をくゆらせながら議論する様はきまっていて、学部生の私にはとても大人びた先輩に思えた。論点を一つ一つ整理し順序だてて議論していく姿勢は、現ア会の当時から田中さんのスタイルだった。例会が終わると、たいていアパート近くの福寿亭という中華料理屋に繰り出して酒を飲んだ。後年、田中さんは広島に来られると福寿亭のことを口にされていた。現ア会のころを懐かしんでおられたのかなあ。

心より田中さんのご冥福をお祈りいたします。

久保亨

いつも、そこに……

田中仁さんは、いつも、そこにいた。主に国民政府期の経済史の研究を進めていた自分にとって、対象とする時代こそ重なるとはいえ、政治史、それも共産党を中心とするそれを研究していた田中仁さんは、それほど近い存在だったわけではない。1980年代初めに挨拶を交わした記憶があるので、もう40年以上のおつきあいになるが、力をあわせて共同研究に取り組むような機会はなかった。しかし、研究会や学会で同席した折、自分が報告したり、発言したりすると、何か一言、二言、コメントをつけて下さるのが常であった。経済と政治、国民党と共産党という研究領域の相違に加え、研究拠点が異なっていたこともあって、二人の間にはある種のライバル意識が漂っていたかもしれない。だから、「いつも、そこにいた」という想いを強く感じるのだろうか。

2020年8月15日のメールで拙著に言及した田中仁さんも、「同世代の“同行”として、学兄のこれまでのしっかりとした足取り改めて楽しく看取いたしました。」と書いてくれた。嬉しかった。このように書いてくれる友人は、得難い。もう、新たに得ることはできない。

坂井田夕起子

田中仁先生の思い出

大阪外国語大学時代の思い出は、箕面の校舎B棟4階から見える夜景と、廊下のつきあたり左手前にある田中先生の研究室です。田中先生にカギを預けていただき、マイクロフィルムの中国語の新聞を読んだ日々。多くの学生が入れ替わり立ち代わりする研究室は、あたたかく厳しい勉強の場所でした。珈琲豆の香りと古い中国の本の独特の匂いとともに、いまでも懐かしく思い出します。

大阪を離れた後、私は病気で手術をし、その後の数年間は療養と出産のために論文を書けないでいました。研究の世界に戻るきっかけをつくってくださったのは、やはり田中先生でした。「中国で報告できるよな」と一言だけいって、大阪大学の中国文化フォーラムに誘ってくださったのです。

田中先生のお誘いがうれしくて、私は個人的に調べていた玄奘三蔵の骨のことを論文にしました。もとは自分の精神的なりハビリのための調査だったので、田中先生には何度も「何がしたいのかわからない」と突き返されたことを覚えています。「言いたいことはわかった」と田中先生が言ってくださるまでにはかなり時間がかかりました。もし、あのとき田中先生が声をかけてくださらなければ、拙著『誰も知らない『西遊記』—

玄奘三蔵の遺骨をめぐる東アジア戦後史』(龍溪書舎)は本になっていなかったと思います。

2020年の退職記念パーティも盛況で、今後、田中先生は悠々自適な研究活動を進めていかれるのだらうと思っていました。もしかすると、仲が良かった加藤弘之先生から、急なお誘いがあったのかもしれませんが。今ごろはあちらで、加藤先生と中国についての議論を続けておられるかもしれない。そんな気がしてなりません。

笹川裕史

紫陽花——田中仁さんへの追悼文

田中仁さんは、私の広島大学時代でいうと、東洋史研究室の先輩であるだけではなく、美術部の先輩でもありました。といっても、学年が4つ離れていたもので、美術部の部室でお会いしたことはほとんどありませんでした。ただ、部室でたむろしていた上級生たちからは、日本画で紫陽花ばかり描いている凄腕の先輩がいるという評判は耳に届いていました。「遊び人の俺たちとは違って、本物だよ!」という、彼らの言い回しも気になっていました。

その後、仁さんと親しくなって、そのうちの一枚を見せてもらいました。こまやかで濃密な抒情性を湛えた紫陽花の絵に驚きました。「紫陽花は時の移ろいとともに、微妙に色合いを変える。僕にはその微細な変化が手に取るようにわかる」。そんな話を何度か居酒屋で聞かせてもらったことを思い出します。

広島を離れ、関西でも研究会等で大変お世話になりました。その頃には、絵筆をもつこともなく、研究に没頭されていました。ひたむきな姿勢は相変わらずでしたが、紫陽花を眺めるゆったりした時間があったのかどうか…。やがて、私の職場は東京近辺に移り、研究面での志向もすれ違うようになって、仁さんとは次第に疎遠になりました。

人は年老いると、若いころの地肌が出てくる、という話があります。もしそれが本当であれば、紫陽花の陰影を見事に描いたように、近現代中国の陰影を描く仁さんに、ぜひ再会したかったと思います。私からみれば、早すぎる旅立ちでした。

心からご冥福をお祈りいたします。

島田美和

田中先生との出会い

田中先生と初めてお会いしたのは、私が大阪大学大学院の修士課程1年の時でした。当時大阪外大ご所属の田中先生は、他大学の学生であった私に受講を許可してくださり、博士課程を終えるまでいつも優しく、そして厳しくご指導くださいました。当時、大阪大学には中国近現代史の授業がなかったため、田中先生のもとで中国政治史の基礎を学べたことは非常にありがたく、もし田中先生の授業に出席できていなかったら、研究者としての今の私はなかったと思います。

博士課程を修了した後も、南開大学、東華大学、大阪大学が共催する国際シンポジウムに毎年参加させてもらい、通訳や中国語でのプレゼンテーション、会議運営などを訓練する機会をいただきました。ここで培った中国語能力は、いま中国語教員として教壇に立つ基盤になっています。また、会議後にはいつも「島田君も来るかい?」と、他の先生方との酒宴に誘っていただきました。田中先生とお酒を飲んでお話しさせていただいた時間は、かけがえのない思い出です。

田中先生からは本当にたくさんのことを学ばせていただきました。それらを大切にしながら、今後も研究と教育に精進していきたいと思います。心からのご冥福をお祈りいたします。

富澤芳亜

田中先生とのおもいで

田中仁先生にはじめてお目にかかったのは、私が立命館大学3年生の1986年頃だった。前年の立命館大ゼミナール大会の講師に西村成雄先生をお招きしたことがご縁となり、翌年から関西の中国現代史研究会の例会に出席するようになっていた。当時の例会は、しばしば立命館大の末川記念会館で開催されていた。田中先生は、例会での議論をリードするとともに、事務局として現代史研の切り盛りもされていた。

しばらくすると、田中先生から立命館での例会後の懇親会会場の確保をお願いされるようになった。4年生の夏頃の懇親会で、場所は金閣寺近くにあった居酒屋「ん」だったと思う。田中仁先生と笹川裕史先生から、広島大学大学院への進学を勧めていただき、翌年4月には入学していた。このように田中先生には、研究者への第一歩を踏み出す上で大変にお世話になった。

その後、広島大学東洋史研究室のサマーセミナーや様々な研究会、学会の場で、田中先生と多くのお話しをし、そこから多くを学んだ。最後にお目にかかったのは、2018年5月の週末に社会経済史学会大会が大阪大で開催された時だった。生協のテラスで一休みをしていると、目の前を田中先生が通りかかれ、暫くお話しをした。研究のために土日も、研究室に出てこられているとのことだった。数年前のオンラインでの研究会に、病室から御出席されたことが気がかりとなっていた。ご逝去を知り、これまでの感謝の言葉をお伝えできなかったことが残念でならない。田中仁先生、ありがとうございました。

松重充浩

田中仁先生のこと

私が田中仁先生と最初にしっかりお話しさせてもらったのは、今、正確な年月日は思い出せないのですが、台北の夏の夜でした。もちろんそれまでも、お目にかかれれば挨拶をし、研究会等では若干の質疑応答もさせていただいてはいましたが、それ以上の交流はありませんでした。その時の台北は、おりからの統一地方選挙だったか総統あるいは立法委員選挙だったか、とにかく選挙運動が大いに盛り上がり、夜になると候補者支援の様々なイベントが各地で行われていました。田中先生と私は一緒にそのイベントを見学に行き、見学後、その選挙を巡る人々から浴びた熱気を冷ますために小さな食堂に入りビールを飲んだのですが、その時が、田中先生からお話しをしっかりと伺った最初でした。

その時の印象は、「田中先生は含羞の人」というものでした。田中先生は、ご自身のご研究の中国近現代史展開理解における位置付けについて熱く語られていたのですが、その熱さが、押しつけがましさのない、どこか恥ずかしさを湛えたものとなっていて、「とにかく、なんでも、言ってやる！」的な主張を吐いていた当時の私自身にとっては、大変新鮮なものに映ったことをしっかり覚えています。

田中先生の含羞がどこから来るものだったのか。当初は、田中先生のなごら健甕を彷彿させる風貌故かとも思ったりしましたが、その後の交流の中で、後進への深いご高配・ご厚情に根ざした他者への思いやりだったのではないかと推察しています。ただ、もう田中先生から直接その答えを伺うことはできなくなってしまいました。残念でなりませんが、今は、台北の夜以降のご高配とご厚情に心から感謝申し上げますとともに、ご

冥福をお祈りするばかりです。

丸田孝志

田中先生の問いかけ

田中先生は、私が広島大学に入学した翌年に就職されており、先生と直接お話しできるようになったのは、私の南開大学留学中に、先生が文部省研究員として中国人民大学に滞在された時からである。博士課程前期進学後半年で、ろくに勉強もせず中国に留学したばかりの私は、北京や天津でお会いする度に、研究に関する基本的なことから現代中国の政治社会の見方に至るまで、すがりような思いで教を乞うた。先生はいつも学生の私と同じ目線に立って、ご自身の経験も交え、ご自身が疑問に思うことも率直に問いかけながら、私の問いに答えて下さった。自信のない私に様々な機会を与えながら、折に触れてそれとはなしに励まして下さったことに今更思い当たる。その後もずっと先生は、いつも同じ目線で様々な疑問を私に語りかけて下さった。

先生は、中国共産党中心の歴史叙述を相対化した中国近現代政治史研究を厳密な実証によって推進される一方で、その関心は常に現代中国の政治や社会を説明できる視点や方法をいかに獲得するかということにあったように思う。そのような問いかけは、時に極めて率直な形で私にも向けられたし、誰とでも胸襟を開いて対話し、幅広い学術交流を世代を超えて進めようとする熱意は、大阪大学中国文化フォーラムと国際シンポジウム「現代中国と東アジアの新環境」を組織・運営する原動力であったと思う。私もその場に長く参加させていたが、その度に、「丸田君、どう思う?」というあの穏やかな問いかけに触れた。先生が病に倒れられてから、香港の大陸化、パンデミック、ウクライナ戦争と世界が大きく変わる中、先生の問いかけを直接聞くことはできなくなってしまったが、悪意と敵意に満ちた非寛容な対立は先生が最も嫌うもので、晩年は友人や学生らのことを思いながら心を痛められていたと思う。先生の問いかけに向き合いながら、私なりの対話を続けていきたい。

水羽信男

田中仁さんとの 1980 年代

田中さんとの付き合いは、1981年に読書会に誘ってもらってからだ。僕は21歳、田中さんは27歳だった。1984年だったか、曾田三郎先生とともに田中さんの結婚式の司会をさせてもらったことは、忘れがたい記憶となっている。一部の反対を押し切った結婚で、式でのおふたりはとてもチャームングだった。

僕にとって田中さんのイメージは、運動のオーガナイザー、そして論争の当事者というものだ。前者の象徴は広島大学での反原理運動の組織だろう。80年代初めの広島大学は中核派の拠点の一つでもあり、さまざまな苦勞を抱えながらも、無党派の大学院生として原理研究会＝統一協会に反対するという一点で運動をまとめたのである。その才能は、2007年の大阪外国語大学の統廃合に際しても発揮されたのではなかろうか。後者では、たとえば大学院生が目指すべきは研究の深化なのか、研究職を得ることなのか、また中国近代史研究者が対峙すべきは日本の歴史学界なのか、中国の中国近代史研究者なのか、広島大学の東洋史研究室内部で行われたこれらの論争において、田中さんは一方の旗手だった。田中さんはなぜどのように研究を進めるのか、という点において極めて自覚的だったといえよう。

そして田中さんは熱烈なカープファン。ボール半分の出し入れで213勝をあげた北別府学投手を覇にしていた。それだからか、田中さんは他者が「見える」人で、中国からの国費留学生の初めての来広を間近かに

控えた 1983 年だったかに、「水羽は他人の心に土足で踏みこむところがある。今度来る留学生たちに軽々に文革時代のことを尋ねるな」と釘を刺された。今でも肝に銘じている批判である。

安井三吉・副島昭一・西村成雄

追悼の辞

田中仁先生のご逝去に謹んでお悔やみ申し上げます。

田中先生のご逝去の報に接し、私ども「老世代」にとりまして、何故天は藉すに今少しの時を以ってせざるか、との思いをますます募らせております。

とくに 1982 年 9 月の中国との国際交流に、今は亡き「老世代」の面々とともに参加され有意義なる時間を共にされ、その後のさまざまな知のプラットフォーム構築にご尽力いただきましたこと、実に鮮明にそれぞれの場面での先生のご活躍が髣髴としてまいります。

私ども「老世代」は、田中先生のお人柄とその着実なる学術的諸成果こそ、国際交流の領域でのご活動の基盤であったと常々実感してまいりました。それにつけても大変残念なる事態となってしまいましたが、田中先生の残さおれた大きな諸事業は、内外の若き世代に間違いなく継承されてゆくものと確信しております。

年初のお年賀には身体のご平癒への歩みと、ご近況のお知らせには新著への新たな取り組みへのご予定が記されていました。当然近くお目にかかれるものと思っておりましたが、その機会をいただけずにお別れせざるを得ないことに、このうえない悲しみを感じております。

「老世代」として改めて田中 仁先生のご冥福をお祈り申し上げます。

瞻望勿及 佇立以泣

奥様はじめご遺族の皆様にはお心落としのなきようご自愛を祈念申し上げます。

2023 年 6 月 14 日 ご逝去 2 か月を経て

安井 三吉 拝

副島 昭一 拝

西村 成雄 拝

盧濤

田中仁先生印象

我与田中仁先生接触不多，但他给我留下了清晰的印象。

1987 年 10 月，我开始在大阪外国语大学跟随汉语专家大河内康宪老师学习研究汉日语言对比。记得当时选修过相浦先生和是永先生的中国文学课以及西村先生的中国历史课。田中先生当时在中国留学进修，所以没能选修他的课。但田中先生的办公室就在大河内老师办公室对面，后来会经常看到他从办公室进进出出。给我的印象是，他总是脚步匆匆，透露出一股少壮派教员的青春活力。白皙的脸庞在近视镜的衬托下透露着十足的学者气息。当年来自社会发展落后但师道尊严气氛浓厚的中国的学生对每一位日本学者都抱有一种本能的敬意，田中先生也不例外。而他的小胡子更是印象深刻。眼镜加胡须是我们日本人刻板印象的重要部分，田中先生都有了，所以总感觉他有一点日本人的典型的意思。几年前他来广岛大学参加学会时仍是一幅当年的风貌，小胡子还是那么与众不同。我想，个人形象的保持也许与其个性与信念的坚守有关吧（据他的学友说，他学生时代就蓄须！）

田中先生那次来广岛大学开会时，和他聊了聊当年在大阪外大学习的情形。散会后，他急匆匆地赶到老校区

附近的一家糕点店，边走边说“不快点那家店就关门了。”田中先生买到了他要买的点心，流露出一股欣慰的神情。我很好奇，便问他“这点心是？”“啊，给我媳妇买的。当年我们常常出没在这一带，经常到这家糕点店喝茶、吃这份点心。这家店竟然还在，我媳妇也一定会高兴的。”由此，我瞬间感到了田中先生的一种稚气与浪漫。他几十年前的青春记忆在此地复苏了，而在他是一位重要的中国现代史专家的认识上又添加了我的一份印象，他是一位情真意切的丈夫。

(2023 年 7 月 1 日记于广岛大学人文社会科学研究生院)